

教師夏目金之助の研究（六）

一教師と作家の間一

森 下 恭 光

結 言

教師夏目金之助の誕生した時を明治26年10月、すなわち東京高等師範学校に英語教師として就任した時点とし、作家漱石が誕生した時を明治37年12月に『吾輩は猫である』を書きあげ、子規門下の高浜虚子等で構成する「山会」⁽¹⁾を経て、俳諧雑誌の『ホトトギス』（明治38年1月号）に掲載された時点とするならば、教師夏目金之助の時期と作家夏目漱石の時期は約12年程重なることになる。

このことは決して偶然の結果として生じたことではない。帝国大学という最高学府⁽²⁾で英文学を専攻した彼にとって教職への道の選択は必然の道ではなく、止むを得ざる選択とでもいうべきであった。文学創作に専念するということと、生活することは余程の資産でもない限り両立しないことであったので、生活の方便として、研究、創作、教育が並行して行える教職を選んだと言ってよいからである。

したがって、文学に専念したいとの願望は、彼が教職にある間は、折に触れて、断続的に募って来、教職を続けるか、文学者としての道に専念するかを選択に迷うことになる。

本論文においては、教師夏目金之助が同時に作家漱石であった期間に創作された2作品、『吾輩は猫である』と『坊っちゃん』を対象として、それ等2作品の中に教師夏目金之助の影がいかなる形で反映しているかを見ることにより、教師であることと作家であることとの間に存在する共通点と相違点を明らかにすることを試みる。

言うまでもなく2作品は創作であることから察しられるように事実がそのままに記されているものではない。しかし、創作の背景にあるものを探求することにより、作家漱石の中にある教師夏目金之助の姿が訴えるものを見出すことになると思う。当然のことながら、作家漱石と教師夏目金之助とは別人格であり得ないという前提がそこにはある。

—

『吾輩は猫である』は、作家夏目漱石の誕生を意味する記念すべき作品であり、この作品で、作家漱石の存在は世に知られ始める⁽³⁾。

本論でこの作品を取り上げる意図は、言うまでもなく、その主人公が教師であるという点に深く関係する。まず、この作品を執筆していた当時は東京帝国大学、第一高等学校の教師であった夏目金之助が、いかなる視点で教師をとらえ、描写しているかを探求することにより、作家漱石の中にある教師と作家の相違点と共通点を具体的にとりあげて行くこととする。

漱石が本作品を発表したのは、明治38年1月より翌年の8月まで⁽⁴⁾であり、10回にわたって俳諧誌『ホトトギス』⁽⁵⁾に断続的に連載された。

執筆の動機は自発的なものではなく、『ホトトギス』の主宰者である高浜虚子に勧められて、1回で完結させるつもりといわば短篇小説として書き始められたものであった。しかし、発表後の読者の反応が良好であったため、次々に書き継いだ結果が長篇になったということであった。

このような事情で発表された『吾輩は猫である』における主人公は、当然「猫」ということに形式上はなるものの、実質的には中学校の英語教師「珍野苦沙弥」⁽⁶⁾ということになる。

作家漱石が、この作品の実質的主人公を中学校の英語教師に設定した理由の主たるものは、彼が現に教師であり、また、過去においても比較的長い教師歴を持っているということにあったと考えられる。

彼の教師歴については、すでに紹介して来たことなので詳述は避けるが、学校名だけ挙げても、明治26年の東京高等師範学校に始まり、明治28年の愛媛尋常中学校、明治29年の第五高等学校、明治33年から明治35年のイギリス留学をはさみ、明治36年から始まる東京帝国大学と第一高等学校というように、5つの学校の教師を歴任していることになる。在職年数は、すでに12年を越える教師歴を持つわけであるから、経験豊富とはいわないまでも、相当の経験を積んでいるとはいえる。その上、高等師範学校、中学校、高等大学、帝国大学というように学校の種類上、段階上においても広範囲であり、それは結果的に学校という社会の内部観察の機会を多くした。

作家漱石は、したがって、『吾輩は猫である』を執筆する時点において、いわゆる教職というものについて、観念的なものではなく、実際に自分自身が教職にあったものとして、また、現にあるものとして、様々な見解や感想を抱懷しており、それを外に対して表出する機会を得ようとして待機していたともいえる状況にあったといえよう。そういう時期に偶然に『ホトトギス』を主宰する高浜虚子の勧めがあり、表出の機会を得たわけである。

それでは、以下に作家漱石の描く中学校教師珍野苦沙弥（以下苦沙弥と略す）の教師としての姿を次に見ることにする。

苦沙弥は、私立文明中学校に勤務する英語教師である。彼は2年2組の担任でもあるから単に英語を教えるだけの立場ではない。猫の観察によれば彼は「学校から帰ると終日書斎這入ったきり殆んど出て来ることがない。家のものは大変な勉強家だと思って居る」⁽⁷⁾が実際は勤勉家ではなく書斎でよく昼寝をしている上に、胃弱のくせに大飯を食うからすぐ眠くなるのである。

また、彼は、人に勝れて出来ることもないのに何にでもよく手を出したがる。俳句を『ホトトギス』へ、新体詩を『明星』⁽⁸⁾へ投稿する他方で「間違いだらけの英文」⁽⁹⁾を書く。さらには、弓、謡、ヴァイオリンと実に多方面にわたり関心を示すが、「気の毒な事には、どれもこれも物になって居らん」⁽¹⁰⁾という人物である。ここに描写されているの中学教師苦沙弥の外観である。

次に、猫によって観察される苦沙弥と作者である教師夏目金之助の間に存在する相違点と共通点、類似点を探ってみよう。

苦沙弥は中学校の英語教師であるが、現実の教師夏目金之助は、帝国大学、高等学校の教師である。但し、中学校教師の経験はある。

教師としての勤勉性が疑われている苦沙弥に対して、夏目金之助には全くそのような事

実はない。胃弱という肉体的弱点は苦沙弥同様にある。俳句は子規の刺激を受けて漱石も作ったが、新体詩はやっていない。英文はもちろん書いたが間違いだらけではない。弓、謡は実際に練習程度は経験している。ヴァイオリンは関心はあったにしても弾いたか否かは不明である。このように見てくると、猫の観察するところ必ずしも作者自身のそれと一致しない。しかし、全く異質な存在として苦沙弥が描かれているわけではない。

実は、この全く異質な存在として描かれているのではないところに意義がある。その理由としてあげられるのは作家漱石自身に内在するものとして、過度ともいえる倫理性と潔癖性があったことが知られているからである。つまり、作家漱石は事実を誇張することはあっても虚偽や虚構は、作家としての立場でも好まなかったということである。

さて、苦沙弥はその交友関係に美学者の迷亭、理学者の水島寒月、詩人の越智東風を持ち、彼等との間に談論風発の別世界を構築している。私立中学の英語教師としては異例というしかないこの交友関係は、帝国大学、高等学校教師である夏目金之助の交友関係をそのまま用いたものとするのが自然であり、こういうところにも作家漱石の姿勢の一端がうかがわれるのである。いわゆる知識階級集団であり、趣味集団でもある彼の交友関係が形成する集団は、それ以外の者達にとって見ると、日常性から遊離した「高等遊民」⁽¹¹⁾として見られ、排斥、敬遠の対象にならざるを得ないのであった。

苦沙弥を中心とする「高等遊民」と称される集団を排斥、敬遠の対象とする外界を象徴するのは、日露戦争終結後の明治後期社会の世俗的勢力ともいえるべき官僚、軍人、実業家達であった。中でも資本主義発展期にあつて急速に社会的勢力を増した資本家のひとりである金田氏ならびにその夫人が苦沙弥に対して示す挑発的態度には極端なものがある。

当然のことながら「高等遊民」である分社会的には勢力を持たず、しかも社会人として未熟な苦沙弥達は、この挑発に対して乗せられ、意識面では対抗しているように見えるものの、その行動は兎戯に等しい。

ところで、日露戦争の終結後における我国の教職は、初等、中等、高等教育機関の種類によって評価の高低に差はあるものの、徐々に聖職という観念が希薄になって来ており、それに比例する形で評価は次第に低下して行つたのであり、中学教師も例外ではなかった。

その意味において、中学教師の苦沙弥が周辺の社会より軽視されているように描かれているのは、その個性的理由に加えて教職一般に対する社会的評価の時代的事情も影響していたことを指摘しておかなければならない。

なお、苦沙弥の中学校教師として見せる固有の資質を描く次の件は彼が当時においても異色の存在であったことを示している。

2年2組を担当する苦沙弥の家に彼のクラスの古井武右衛門が困却した様子で相談に来たところ、苦沙弥はその青年の名前、学年、クラスのすべてをことごとく忘れて思い出せないばかりでなく、困却して相談に来た理由を聞いてもなかなか理解しない。この辺りの様子を猫は「元来不人望な主人の事だから、学校の生徒杯は正月だろうが暮だろうが殆んど寄り付いた事がない。寄り付いたのは古井武右衛門君を以て嚙矢とする位な珍客であるが、其来訪の主意がわからんには主人も大に閉口して居るらしい」⁽¹²⁾と描写している。暫く両者の間に問答があり、来意が金田令嬢へのラブレターに自分の名前を貸したことから、金田家との間にトラブルが発生し、それが原因で退学になりはしないかと心配し、ク

ラス担任である苦沙弥を頼って来訪したものであることが判明する。にもかかわらず苦沙弥は冷淡にも相談に乗ってやらない。ところが、この対応に対し猫は、この冷淡さこそ彼の正直を証明するものと評価する。猫はここで観察者の立場から人物評論家の立場に移っている。端的に言えば、苦沙弥はその正直さの故に学校を含め、俗世間から軽視されていると見るのである。そのように評するかぎり責められるべきは正直者の苦沙弥ではなく、それを評価しない世間つまり俗世間であるということになる。

しかし、ここで苦沙弥の側でもなく、俗世間の側でもない客観的立場に立ってこの事例を検討すると別の評価が成立するであろうことが想像される。

一般論としてこの事例を評価するならば、クラス担任の職責として、クラスの一員である生徒が相談に訪れたばあい、その事態や事由の如何にかかわらず、まず生徒の来意の理解に努め、その上で、その時点で担任の為し得るすべての配慮とそれに基づく实际行动を起すべきであろう。ところが、苦沙弥にはそれが見られない。のみならず、人間は本来、他人の事に対しては自分の事ほどには真剣になれないものであるとの人間本性論を援用して、自己の冷淡を正当化しているかのようである。クラス担任の職責を果たすことを意志する前に、一個人として自己に忠実であろうとしているともいえるこの対応は、やはり問題があると考えるべきであろう。

教職者は確かに一個の人間ではあるが、彼の生活を支えている教職は、人間であることによって成り立っているというよりも、教育することによって成り立っているのであるから、まず教職者としての職責つまり、教育することが最優先されなければならないと考えるべきであろう。

このように見てくると、苦沙弥は人間としての品性はともかく、教師としての資質、能力を評価対象とするならば、疑問を抱かざるを得ない人物であるということになる。

ところで、この苦沙弥を作家漱石はどう評価しているのであろうか。

すでに論じて来たように、作家漱石は猫として作中に活動しているので、猫の眼はそのまま漱石の眼でもある。したがって、苦沙弥を弁護し、評価する猫の視点は、そのまま漱石の視点であると考えるのが自然である。

『吾輩は猫である』を執筆した当時の作家漱石は、教師夏目金之助として東京帝国大学、第一高等学校で教鞭を執る実生活に決して満足していたとはいえず、かえって不満の方が強く、精神的には不安定な状態にあったと考えられるので、猫になり変わった作家漱石が現実の教師夏目金之助の分身ともいえる苦沙弥を弁護する形になるのは止むを得ないことともいえるのである。

二

『坊っちゃん』は明治39年4月1日に『ホトトギス』誌上に発表された。

主人公は坊っちゃん、東京の「ある私立の中学校を卒業」⁽¹³⁾した後、更に勉強しようと考えた彼は学校選びをするが「学問は生来^{しやうらい}どれもこれも好きでない。ことに語学とか文学とか云うものは真平^{まへら}御免だ」⁽¹⁴⁾と思う。そういう彼が入学を決めたのは偶然通りかかった物理学校であった。3年間そこで学んだ彼は成績は芳しくはなかったが無事卒業し、校

長の紹介で「四国辺のある中学校」⁽¹⁵⁾に数学の教師として赴任する。月給は40円であった。

坊っちゃんの出自、性向、学歴、就職の経緯を軽快な筆致で作家漱石は紹介する。江戸っ子の坊っちゃんが最終学歴になる物理学校を卒業した時、校長から就職先を紹介される。その際の坊っちゃんの対応は独特であるが、それはこの小説の展開の方向づけになる。

「おれは3年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎へ行く考えも何もなかった。尤も教師以外に何もしようと云うあてもなかったから、此相談を受けた時、行きましようとして即席に返事をした」⁽¹⁶⁾という。

作家漱石は、主人公坊っちゃんの経歴を自身の経歴と意図的に異なったものとして設定する部分と、意図的であるか自然的にであるかは不分明であるが結果的には自身の経歴と重ねている部分を見せている。

まず、学歴であるが、坊っちゃんの学歴は私立中学を経て物理学校を卒業したことになる。漱石の方は、第一高等学校を経て帝国大学文科大学英文科を卒業している。学歴の上ではこれ程の距離がある。

自身の学歴とは極端に異なる坊っちゃんを敢えて創作した作家漱石の意図が何であるかは不明であるか、そうすることの有効性は当然計算されていたと考えられる。

坊っちゃんの最終学歴になる物理学校は、明治14年6月に創立された私立学校である。中学校卒の坊っちゃんは、「師範学校中学校卒業ノ者ハ本校第2学期へ無試験入学ヲ許ス」⁽¹⁷⁾と定めている物理学校に無試験で入学した。

しかし、物理学校は入学は容易でも卒業は困難であることは当時でもよく知られていた。⁽¹⁸⁾卒業するには第1学期から第6学期まですべての学期を終了しなければならなかった。卒業式には、各学期の修業証書と卒業証書が授与されたという。⁽¹⁹⁾しかも、明治35年の時点で同校は専門学校令⁽²⁰⁾の適用を受けていなかったのも、文部省の検定試験に合格しなければ物理、数学、化学の中等教員免許状は取得できなかった。

入学しても卒業するものが少なく、卒業しても教員免許を取得するには文部省の検定試験に合格しなければならなかったという事情を漱石が知っていたか否かは疑問の残るところではあるが、漱石は、坊っちゃんを物理学校卒業で、数学の免許を取得している「学問は生来どれもこれも好きでない」青年教師として設定した。

いうまでもなく、漱石は坊っちゃんと異なり、学問好きであり、専攻したのも理科や数学ではなく、英文学であった。卒業したのは帝国大学であるから教員免許を取得するのに文部省の検定試験を受ける必要はなく、自動的に取得している。

学歴、性向、資格取得について見てもこれだけの違いが両者の間にはある。

しかし、校長から中学校を就職先として紹介された時の坊っちゃんの反応は、漱石が帝国大学卒業後、大学院に進学したものの英文学を研究しつつけることに不安を感じ始めた頃に文科大学校長の外山正一の推薦を得て、東京高等師範学校に就職することになる間の心境⁽²¹⁾に類似している。それは、大正3年11月25日に学習院で行った「私の個人主義」⁽²²⁾と題する講演の中で述べていることによっても明らかである。漱石は積極的な意欲と関心をもって就職したのではないことがそこには述べられているのである。ただし、就職先といっても坊っちゃんのばあい、地方の中学校であるのに対して、漱石のばあいは東京に所在する教員養成の最高機関である東京高等師範学校であるから、そこへの就職に積極的意

欲を示さない漱石の意識の高さを考慮するならば単純に類似すると言い切れない部分を残す。

次に待遇について両者を比較すると、坊っちゃんの就職する中学校は月給40円であるのに対し、漱石の就職した東京高等師範学校は年俸450円⁽²³⁾であったから、月給に換算すると、坊っちゃんの就職した中学校の方が少し良いことになる。

このように、坊っちゃんの経歴を漱石のそれと比較検討すると類似点・共通点と全く異なる点のあることが明らかになる。

さて、地方の中学校に数学教師として赴任する坊っちゃんは赴任早々に種々な面でカルチャーショックとでもいうべきものを体験する。その主なものとしては、東京対地方という文化の違いからくるものと、教師としてその中に身を置く学校という社会と一般社会の違いからくるものの2点があげられる。

まず、東京という大都会の文化と地方都市の文化の相違からくるカルチャーショックであるが、それは対人関係の様相において顕著にあらわれる。

大都会の東京における対人関係は、下町と山手の差異はあるものの原則的には開放的、淡白、不干渉をその特色とするのに対して、地方都市におけるそれは、閉鎖的、濃密、過干渉であることを特色とすると言っていいであろう。

江戸っ子である坊っちゃんは、大都会東京の文化の中で成人しているので、当然のことながら、対人関係において顕著にあらわれるこのカルチャーショックに衝撃を受ける。

とくに、赴任校である中学校の生徒達から坊っちゃんに向けられる関心や対応は、不快感を募らせずにはおかないものであった。

校内、校外を問わず、坊っちゃんの言動の一部始終が監視されているかのように見える出来事の数々は、嫌悪感を抱かせるまでに発展する。

この間の事情を描写したものとしては、蕎麦屋で天ぷらを4杯食べた翌日、教室の黒板に「天麩羅先生」⁽²⁴⁾と書かれたこと、団子屋で団子2皿食べた翌日、教室の黒板に「団子2皿7銭」⁽²⁵⁾と書かれたこと、温泉で8銭の「上等」へ毎日入ると40円の月給で毎日上等に入るのはぜい沢だと言われた⁽²⁶⁾こと、湯壺で人の居ないのを見済まして泳いだら間もなくざくろ口近くに「湯の中で泳ぐべからず」と書かれた札が貼りつけられた上に、学校でも黒板に「湯の中で泳ぐべからず」⁽²⁷⁾と書かれたことなどがあげられよう。

ここまで監視されていることがわかれると、坊っちゃんは、「何だか生徒全体がおれ一人を探偵して居る様」⁽²⁸⁾だと思ってしまう。そして、「何でこんな狭苦しい鼻の先がつかえる様な所へ来たのかと思うと情けなくなった」⁽²⁹⁾と慨嘆する。

次に、一般社会に生活して来た坊っちゃんが教師になることによって身を置くことになった学校という社会ならびに教師集団から受けるカルチャーショックがあげられる。

赴任早々に校長から受ける訓辞が坊っちゃんには衝撃になる。校長は「無鉄砲な」⁽³⁰⁾彼に対して「生徒の模範になれの、一校の師表と仰がれなくては行かんの、学問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする」⁽³¹⁾。坊っちゃんにとっては「法外な注文」と聞こえるこの訓辞は、しかし決して法外なものではなく、むしろ常識的なものであるか、それを法外と感じるところにこそカルチャーショックという現実がある。教師になるための教育を全く受けていないわけではないにもかかわらず、

あまりに一般社会とは異なる規範に改めて衝撃をうけたのである。

カルチャーショックの衝撃を受けた坊っちゃんは、一般社会から入って来た者の眼で職場の教師達を見た印象をニックネームにして表現する。以下にあげるのはその主なものである。

まず校長は、「薄髯のある、色の黒い、眼の大きな」外見から「狸」と命名する。教頭は、赤いフランネルのシャツを着ていることから、「赤シャツ」と命名。英語教師の古賀はうらなりの唐茄子ばかり食べたように蒼くふくれている外見から「うらなり」と命名。数学教師の堀田は、毬栗坊主で、叡山の悪僧のようであるから「山嵐」、画学の教師吉川は芸人風であるところから「のだいこ」と命名する。

教師生活を始めた途端に衝撃を受けたとはいえ、それは教職の職務内容のすべてに関するものではなかった。数学主任の「山嵐」こと堀田から授業上のことで説明を受けた彼は「別段^{いざなり}づかしい事もなさそうだから承知した。此位の事なら、明後日は愚^{おろか}、明日から始めると云ったって驚ろかない」⁽³²⁾と、数学を教えることに関しては自信を見せている。

いよいよ授業を始めた坊っちゃんが初日に5時間の授業を終えた後の感想は、「教師ははたで見る程楽じゃない」⁽³³⁾というものであった。3時過ぎになって1日の勤務が終るし、解放されたところで、彼は主任の堀田に対して、「君何でも蚊^{あき}んでも3時過ぎ学校にゐさせるのは愚だぜ」⁽³⁴⁾と訴えると、堀田は笑った後真面目になって「君あまり学校の不平を云うと、いかんぜ。云うなら僕^{わし}文に話せ、随分妙な人も居るからな」⁽³⁵⁾と忠告する。これは後に相次いで発生するトラブルを予感させることばとして聞くべきものであった。

1週間程が経過すると、彼は「学校の様子も一と通りは飲み込めた」⁽³⁶⁾と楽観してしまう。そして、他の教師ならば辞令を受けた当初の1ヶ月位の間は、自分の評判を気にするところだが、自分は一向に気にしない。それが自分の気性だと言い切る。

しかも、「此学校がいけなければすぐどっかへ行く覚悟で居たから、狸も赤シャツも、些とも恐しくはなかった。まして教場の小僧共なんかに愛嬌も御世辞も使う気になれなかった。」⁽³⁷⁾とまで言ってしまう。ここで明らかになるのは、彼が受けたカルチャーショックは、彼の人格を在迫する形では作用せず、反って強い反撥となってその原因である学校ならびに教師集団に向かう性質のものであったということである。

就職の時点から、教職というものに執着するところのなかった彼は、不都合を感じればいつでも捨てて離れる覚悟を持っていたといつてよい。

しかし、このような意識は、教職に就く者の意識としてはきわめて稀なものであり、その意味で、坊っちゃんとはもともと教職になじまないものを濃厚に持つ異質の存在であるということになるであろう。そのような人物にとって、教職という職場が平穩であることは困難である。果たして、彼の周辺には相次いでトラブルが発生する。

「バツタ事件」、「師範学校生徒と中学校生徒との衝突事件」、「マドンナ事件」がそれである。

「バツタ事件」⁽³⁸⁾は、初めての宿直日に温泉へ出掛けてから宿直した坊っちゃんは寄宿者の生徒達の悪戯で蒲団の中にイナゴを入れられる。憤慨した彼は生徒達と必死に対抗するが容易に収拾しない。結局、校長が出て騒動は終結するが、この事件をめぐる生徒達と坊っちゃんの応酬と事件後に学校側がとった生徒の処分にかかわる対応に、教育者の偽善

性を見出し、職場に対する嫌悪感を募らせる。

坊っちゃんの倫理観では、理非曲直を明らかにするのが社会の掟であるが、学校という社会ではそれが行なわれないことに不信感を抱くことにもなる。

「師範学校生徒と中学校生徒との衝突事件」は、日清戦争の祝勝会が練兵場で行なわれた当日、式に参加した師範学校生徒と中学校生徒が衝突する事件。坊っちゃんの解説では、「中学と師範とはどこの県下でも犬と猿の様に仲がわるいそうだ。なぜだかわからないが、丸で氣風が合わない。何かあると喧嘩する。」⁽³⁹⁾というのである。朝の衝突では中学校側が譲歩して収まったものの夜になって中学側が意趣返しに喧嘩を始めてしまう。師範側560人に対して中学側は3割方多く、数の上では優勢であるが互いに激しい格闘を展開する。その群れの中に仲裁のため入って行った堀田と坊っちゃんが紛争に巻き込まれてしまった上に、出勤して来た15.6名の巡査から逃がれた生徒達に取り残された2人が捕まってしまうという結果になる。この事件は新聞で報道され、事件の主謀者は中学教師2人であるとして、教育界からの2人の追放が唱えられる。

堀田はこの事件の背後には教頭の赤シャツが居り、事件もそれに関する新聞の報道も赤シャツの奸計によるものと断ずる。この事件により、「バツタ事件」によって始まった坊っちゃんの学校や教師に対して抱き始めた嫌悪感や不信感はいよいよ増幅することになる。

「マドンナ事件」⁽⁴⁰⁾は英語教師古賀の許婚者である「遠山のお嬢さん」(地方一の美人であることからマドンナと呼ばれている。)をめぐるトラブル。

そのマドンナに好意を寄せる赤シャツは、父親の死去で経済状態が悪くなった古賀の結婚延期を機に、マドンナに求婚をする。やがて古賀は延岡へ栄転ということでマドンナから離れて行く。この経緯を知ることになった時、堀田と坊っちゃんは、もはや赤シャツに天誅を加えるべき段階であると判断し、その計画を立てる。二人は赤シャツが「角屋」に芸者と同宿したのを確かめ、翌朝5時に「角屋」から出て来た赤シャツを捕えてその不徳を責め、堀田と坊っちゃん是一緒に出て来た吉川(のだいこ)も合わせて制裁を加える。

その直後、校長宛の辞表を書き郵送した坊っちゃんはその日の午後6時の汽船でその地を離れる。

東京へ戻った坊っちゃんは街鉄の技手になる。月給は25円である。教職を何の未練もなく捨て、教職とは全く縁のない街鉄という職業に就いたことと、東京で25円という月給に地方で40円得ていた坊っちゃんが甘んじるという設定は作家漱石の教職への反撥を感じさせるものがある。

坊っちゃんの受けたカルチャーショックの中で、一般社会から学校社会に入った者が受ける衝撃は、教師でもある作家漱石にとっては日常的なことである故に本来、衝撃にはなりにくいものであるが、教師である漱石自身、その身を置く東京帝国大学、第一高等学校という学校社会は、坊っちゃんが受けた衝撃さながらに彼にとっては不快なことの連続であったと見るべきところがある。

次に東京という大都市から任地の地方都市へ移ることによって坊っちゃんが受けたカルチャーショックは、明治28年4月に東京から愛媛県尋常中学校に赴任するために松山へ移ったという経歴があるので、誇張されてはいても本質においては同質のカルチャーショ

ックがあったことは認められる。

以上によって明らかのように、作家漱石は意識的に教師夏目金之助を離れて創作する側面と、敢えて両者を重ね合わせる側面と、さらに、意識的にか無意識的にかは不分明なままで結果的に両者が重なってしまっている側面とを持つ。それは、結局、作家漱石は同時に教師夏目金之助であることに起因することであったと考えられる。

結 言

本論によって明らかにされたことは次のように要約される。

まず、『吾輩は猫である』、『坊っちゃん』の2作品の主人公は、いずれも「苦沙弥」、「坊っちゃん」と呼ばれる中学校の教師である。作家漱石が誕生した時点では教師夏目金之助は第一高等学校、東京帝国大学の教師であって中学校の教師ではない。しかし、過去に約1年間、中学校教師を勤めた経験を持つ。この経験から、2作品には中学校教師の内面や外面、ならびにその職場である学校の内面および外面を知り得る立場にあるため、中学校を中心にしながら、広くは教師や学校の持つ表裏の二面性を観察者、当事者の立場から批評している。

次に、「苦沙弥」と「坊っちゃん」ではその個性において共通性が乏しいが、社会性が未熟であることに共通点があり、その未熟さを純粹さに置き換えて、過激なまでに教職者や学校、さらには一般社会の汚濁を糾弾している。

これらのことから、作家漱石は教師夏目金之助であることの立場であることをいかしなが、同時に自己がそれによって生活の糧を得ている教職や学校社会について、自己矛盾をかかえながら一種の内部告発のようにも取れる形で激しい批判を試みていると考えることができる。教師や学校を批判することは自身が教師であり学校に勤務する漱石にとっては自責の構造を持つことになる。

(注)

- (1) 「山会」は正岡子規の「文章には山がなくは駄目だ。という主張に基いて始められた。高浜虚子、漱石氏と私、アルス、大正7年、84-85ページ。
- (2) 漱石が入学した時点(明治23年9月)では、帝国大学は1校だけであった。帝国大学令(明治19年3月2日公布)によって東京に1校だけ設置されたのである。文部省、学制100年史、ぎょうせい、昭和51年、363-365ページ。
- (3) 漱石は『ホトトギス』誌上に『吾輩は猫である』第1を発表して作家として知られることになる。荒正人、夏目漱石、五月書房、昭和32年、134ページ。
- (4) 『吾輩は猫である』を『ホトトギス』に発表した期間は第1~第6までが明治38年2月から9月まで、第7~第11までが明治39年、1月から8月までであった。瀬沼茂樹、夏目漱石、東京大学出版会、1962年325-326ページ。
- (5) 『ホトトギス』は明治30年に正岡子規が支援し、柳原極堂の編集で松山市で発行。明治31年東京に移り、高浜虚子が編集に当たった俳句雑誌。古川久の解説(漱石全集第1巻、岩波書房、1978年、226ページ。)による。
- (6) 漱石独特の命名で、動物のチンがくしゃみをした顔のような人物という意味らしい。
- (7) 漱石の日常生活を写したものと見られる。漱石、吾輩は猫である漱石全集第1巻所収、

岩波書店、1978年、7ページ。

- (8) 『明星』は、与謝野寛が明治33年4月に発刊した詩歌雑誌で、同41年まで続いた。古川久解説、前掲書、227ページ。
- (9) 漱石、吾輩は猫である、漱石全集第1巻所収、岩波書店、1978年、9ページ。
- (10) 同前書、9ページ。
- (11) 高等遊民は資産家で、定職を持たないばあが多い。
- (12) 漱石、吾輩は猫である、第2巻所収、岩波書店、1978年、151—152ページ。
- (13) 漱石、坊っちゃん、漱石全集第3巻所収、岩波書店、1979年、210ページ。漱石自身は、明治14年に東京府第一中学を退学している。
- (14) 同前書、212ページ。漱石独特の反語的表現である。
- (15) 同前書、213ページ。四国辺とあるだけで愛媛県とは作中のどこにも書かれていない。
- (16) 同前書、213ページ。漱石自身は『私の個人主義』にもあるように、東京高等師範学校への就職を即決したわけではない。
- (17) 平岡敏夫、評訳、『坊っちゃん』、国文学、夏目漱石、学燈社、昭和54年、116ページ。
- (18) 同前書、116ページ。
- (19) 同前書、116ページ。
- (20) 文部省は、明治36年3月27日に「専門学校令」を公布した。
- (21) 漱石、私の個人主義、漱石全集第21巻所収、岩波書店、1979年、135—136。高等学校と高等師範のどちらを選ぶかに迷う気持が述べられている。
- (22) 同前書、129—157ページ。学習院の同窓会である輔仁会での講演。
- (23) 瀬沼茂樹、前掲書、319ページ。
- (24) 漱石、坊っちゃん、前掲書、227ページ。
- (25) 同前書、229ページ。現在、この団子は「坊っちゃん団子」として名物になっている。
- (26) 同前書、229ページ。漱石は愛媛尋常中学校で月給80円支給された。在職中、道後温泉によく入浴した。
- (27) 同前書、230ページ。
- (28) 同前書、230ページ。漱石は、追跡する者を「探偵」と呼び嫌悪する。
- (29) 同前書、230ページ。地理的に狭いということよりも、行動の一部始終がすぐ伝わる状況をこのように表現している。
- (30) 同前書、218ページ。『坊っちゃん』の冒頭に、坊っちゃんは自分の性向を「親譲りの無鉄砲」と表現している。
- (31) 同前書、218ページ。漱石が東京高等師範学校に就職する折に校長の嘉納治五郎がこれと同様の訓辞をしたと『私の個人主義』にある。
- (32) 同前書、221ページ。漱石が愛媛尋常中学校で英語を教えた時の気持はこれに近いものであったろう。
- (33) 同前書、224ページ。学校の種類に関係なく、教師は楽な仕事と見られがちであることを指している。
- (34) 同前書、224ページ。これは漱石の合理主義を表わすことばとして読める。
- (35) 同前書、224ページ。学校社会の閉鎖性は漱石の実感である。
- (36) 同前書、225ページ。就任後1週間で学校の様子を飲み込めたと思う、坊っちゃんの幼稚さが表われている。
- (37) 同前書、326ページ。明治29年11月発表の『愚見数則』に同様の見解が見える。
- (38) 「バツタ事件」は、坊っちゃんが宿直した夜、寝床に「バツタ」（実はイナゴ）を入れられるという生徒によるいたずら事件。
- (39) 漱石、前掲書、301ページ。中学校と師範学校の制度上の違いから来る面もある。明治19年4月10日公布の「中学校令」によれば「実業ニ就カント欲シヌハ高等ノ学校ニヘラン

ト欲スルモノニ順要ナル教育ヲ為ス所」が中学校である。これに対して、師範学校は、明治19年4月10日公布の「師範学校令」によれば、「師範学校ハ教員トナルヘキモノヲ養成スル所」とある。（文部省，学制100年史，前掲書，341ページ，378ページ参照）

- (40) 「マドンナ事件」の「マドンナ」は、古賀の許婚者の綽名で、画学教師の吉川が、ラファエロの画にある「マドンナ」に例えたもの。この「マドンナ」を教頭の「赤シャツ」が古賀から奪う形になる。

※引用文中の旧漢字，旧仮名遣いはすべて新漢字，新仮名遣いに改めたことをことわっておく。